†路地裏の風使い†　記憶の扉

しまこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†路地裏の風使い†　記憶の扉

【Ｎコード】
Ｎ０４５８ＢＡ

【作者名】
しまこ

【あらすじ】
真夜中の静けさは美しいけれど　僕の不安を煽るだけ
朧気な記憶が　無力な自分を孤独に引きずり込む　僕は今ここにいていいの？
夢と記憶に苛まれるカナタのお話。

（前書き）

出来ればｓｔｒａｙ　ｃｒｙ　ｂａｂｙ．の後にお読みください。

真夜中の静けさは美しいけれど　僕の不安を煽るだけ
朧気な記憶が　無力な自分を孤独に引きずり込む　僕は今ここにいていいの？

夢を見た。
赤く鮮明な空の色。
けれどそれは本物の空では無くて。
石の壁に描かれた、光りのない空の絵だった。

カナタは額の汗を拭うと、震える自分の指先を見つめた。そして自室の小さな窓を見上げると、暗い夜空に浮かぶ月を目に捕らえて息を吐いた。
呼吸をする度、胸が軋む。まるで鍵を掛けた扉を無理にこじあけようとしているようだ。
誰が？
もういい加減に許して欲しい。
何を？
誰に何の許しを請うというのだろう。
惚けるな。もう全て思い出しているくせに。
耳元で誰かが囁いた気がした。
知っているなら早く罰を与えてくれればいいのに。こんなふうに

夜毎目を覚まし自らの罪を自答するよりは、いっそ石を投げ付けられる方がいい。次にこの塔から出る時は死ぬ時だって良かった。

そうして救われるのは誰なのか。紛れも無く自分だけ。

ああ、結局自分の事しか考えて無いんだ。カナタは自嘲気味に笑う。なんて効果的な罰だろう。絶対救われない、永遠に繰り返される悪夢は、自分の心を確実に蝕んでいく。

そうしていつかは人間ではなくなり、望むべき罰を与えられる存在になるに違いない。

だからこれでいい。自分の愚かさを知り、罰を与えられる存在に近付く。終わりにしたかった。全て。

胸が軋む。扉の向こうにいるのは誰？

朝焼けが部屋のまどろみを侵蝕する。扉を叩く音がして、胸の奥が悲鳴をあげた。

「おはよう。起きてたか」

軋む扉を開く、蒼い瞳は曇りを知らない空の色。

おはよう、と伝える手が震える。まるで救いを求めるように。本当に欲しいのは罰なのに。咄嗟に握り締めた拳は贖罪を求めている。

何食わぬ顔をしてベッドから降りると、床が爪先を刺激する。まるで冷たい湖の上に立っているようだった。真冬の僅かな体温を奪うように、現実に降り立っても、安堵感は無かった。

「……また夢見が悪かったんだろ。顔に書いてある」

カナタが顔を上げると、ヨーダが額に手を当てた。温かい掌が孤

独の冷たさを奪っていく。途端に穏やかな現実感が胸に広がった。

「なんて顔してんだ。終わらない夢なんて無いよ。お前は今ここにいる」

”泣き出しそうだ”

「何に？」

”穏やかな現実に住まう自分を、誰も罰しようとしない”

真っ直ぐな蒼の視線が、ほんの少し揺らいだ気がした。ヨーダは額に当てた手でカナタの前髪を梳くように頭を撫でた。

”どうして？　僕はコゼットを……モモを”

「今はもうそんなこと考える時じゃないだろ。罰ならもう受けた。必要のない罰までをね」

三年前、自分は罰を受けた。けれどその記憶が残っていない。残っているのは罪の意識だけ。カナタはその腕に焼き付いた枷の痕をヨーダの前に突き出した。

”傷だけ残っていても、記憶が無ければ意味が無いじゃないか”

「それだけ罪の意識に苛まれてれば、それだけでもお前に取ったら罰だろ。そもそもお前の犯した罪って何？」

真っ直ぐな視線が、揺ぐカナタの瞳を捕らえている。沈黙を書き

消したのはカナタの嗚咽だった。涙が止めどなく溢れて、両腕の焼け痕を伝う。

「俺、あの場所にいなかったけど、いたらお前と同じ行動取ってたよ。あれを罪というなら、俺は何も知らずこの街で善人面してる奴等を絶対許さない」

カナタはその場に崩れ落ちるように膝をつき泣いた。
真っ直ぐな声が、言葉が辛い。胸が張り裂けそうだった。
耳に入る言葉はいつだって自分の都合のいい言葉だけ。

「もしそれでもまだお前が自分の行いを罪とするなら、受けるべき罰はこんなことじゃないだろう、償うならもっと他にあるはずだよ」

ヨーダがカナタの前で膝を折り、頭を乱暴に撫でる。
ごめんなさい。本当に欲しい言葉はいつだって目の前にある。本当に欲しいのは罰ではなく慰めの言葉。自分はそれをわかっていて、差し出される両腕に甘えている。卑怯だ。

胸が軋む。扉を叩くのはいつだって自分。

だから僕は僕を逃がさない。決して許さないから。

誰でもいい。扉の向こうで石を投げ続けていて。

（後書き）

次回更新予定の作品は†路地裏の風使い†　ｄｅａｒ．です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0458ba/

†路地裏の風使い†　記憶の扉

2011年12月31日23時52分発行